

中学生のいじめ体験に関する研究 —いじめの立場における心理的特徴—

石田 靖彦* 中村 友一**

*学校教育講座 (心理学)

**雁が音中学校

A Study of Bullying among Junior High School Students

Yasuhiko ISHIDA* and Yuuichi NAKAMURA**

*Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Karigane Junior High School, Kariya 448-0011, Japan

Keywords : いじめ体験、立場、心理的特徴、中学生

問題と目的

小中学校におけるいじめの認知件数は、平成18年度以降減少傾向にあるものの、平成23年度では小学校の32.9%、中学校の53.7%の学校でいじめが発生しており、とくに中学校において深刻な状態が続いている(文部科学省, 2012)。

現代のいじめは、ときとして自殺や殺人事件に発展するほどに深刻な問題をはらんでいる。また、子どもたちがいじめを遊びやふざけとして日常生活のなかに取りこみ、お互いを責め苛み、人が傷つくことを楽しむという体験は、子どもたちの人格形成や人間観の形成にはかりしれない影響を与えられ考えられる。それは、いじめられている子だけではなく、いじている子も、これをまわりで見ている子に対しても同様である。

いじめの発生原因については、さまざまな要因が関連していることが指摘されている(国立教育政策研究所生徒指導研究センター, 2009; 文部科学省, 2012)。そのなかで丸山(1999)は、思春期の児童生徒を対象にして、いじめの加害者と被害者の心理的特徴の違いについて検討し、いじめの加害者は大人への反抗心が強いのに対し、被害者は自分の気持ちを表現することが苦手な友だち集団への依存が高いことを明らかにした。

丸山の研究は、思春期におけるいじめに関連する要因を、加害者と被害者の心理的特徴の違いという観点から明らかにした点で示唆に富む。しかし、いじめ場面で大多数を占め、いじめを助長し、継続的なものに

しているものは、いじめを見て見ぬふりをする「傍観者」や、いじめをはやし立てる「観衆」の存在である。森田・清水(1994)は、傍観者の特徴として、学級活動をうまくこなしながら将来は大学へ進み、教師からは問題児としてみられず、いじめでは局外に立ちながらも、決して加害者や観衆には批判的な意識を持たず、むしろある部分では共感を示しつつ、ほかの級友たちとも安定した人間関係を築いている、ということを挙げている。また正高(1998)は、傍観者は暴力行為を心の中では否定しながらも、実際にいじめ場面でとりうる態度は、周囲の多くのクラスメートに左右されることを指摘している。

傍観者や観衆がいじめに対して否定的な反応を示し、クラス内にいじめを否定する規範が形成できれば、加害者もいじめを継続しにくくなるだろう(大西・吉田, 2010)。つまり、いじめの継続には、かなりの数にのぼる傍観者と観衆の反応によって決まると考えられる。いじめ体験者の大多数を傍観者と観衆が占めているということは、これらの立場に属する人達がいじめを解決する側に回れば、いじめの減少、早期解決につながっていくことが考えられる。これらの理由から、いじめを考察するうえで傍観者と観衆の特徴についても検討する必要がある。

そこで本研究では、いじめ場面でとられうる立場として、「加害者」、「被害者」、「傍観者」、「観衆」、「解決に向けて働きかけた者(解決者)」の5つの立場を設定し、それぞれの立場の体験率と生徒の心理的特徴との関連について検討し、それぞれの立場を行いやすい人とはどのような心理的特徴を有するのかを明らかにする。

なお、調査対象については、中学校でいじめが急増するという結果（文部科学省，2012）を踏まえ、本研究では、中学2年生を調査対象とすることにした。

方法

調査対象

愛知県下の公立中学校2年生219名（男子111名、女子108名）を対象に、質問紙調査を実施した。調査の実施に際しては、研究の目的と情報の守秘を周知した上で、無記名での回答を求めた。

質問内容

1. いじめ場面における加害者、被害者、傍観者、観衆、解決者の経験の有無

5つのいじめ場面（「落書き」、「もの隠し・もの壊し」、「無視・仲間はずれ」、「接触拒否」、「殴る・蹴る」）を具体的に設定し、それぞれの場面で体験した立場（加害、被害、傍観、観衆、解決）を、複数回答を許して回答させた。なお、具体的な内容は、以下のとおりである。

落書きの場面の例：数人の友達といっしょに、〇〇くん（〇〇さん）のノートや教科書などの持ち物、または教室の黒板に、〇〇くん（〇〇さん）の悪口を書いてからかった。

1. 上のようなことをしたことがある
2. 上のようなことをされたことがある
3. 上のような場面をみたことがある
4. 3で「はい」と答えた人は、その時あなたがとった行動について答えて下さい。
 - (1) 特に何もしなかった
 - (2) はやしたてた
 - (3) 先生に報告した
 - (4) 直接やめるよう注意した
 - (5) 友達と相談してやめさせようとした
 - (6) その他（ ）

分析では、1で「はい」と答えた人を「加害者」、2で「はい」と答えた人を「被害者」、3の(1)で「はい」と答えた人を「傍観者」、3の(2)で「はい」と答えた人を「観衆」、4の(3)～(5)で「はい」と答えた人を「解決者」として扱った。なお、全ての設問に答えてもらっているので、1つの場面で複数の立場を体験していることもありうる。また、エピソードの文内では、加害体験のある被調査者にもネガティブな印象を与えないように、「いじめた」「いじめ」などの言葉は意図的に使用しなかった。

2. 生徒の心理的特徴

丸山（1999）を参考にして、中学生の心理的特徴を表す質問41項目を作成した。回答は、「そう思う」～

「そう思わない」の5段階で評定させた。

主因子法による因子分析（プロマックス回転）を行ったところ、「自己肯定感（11項目）」、「友達への同調傾向（8項目）」、「友達からの承認欲求（7項目）」、「大人に対する信頼感（5項目）」、「反優等生願望（5項目）」の5つの因子が抽出された（Table 1）。

結果

1. いじめ場面における各立場の体験率

Table 2およびFigure 1は、それぞれのいじめ場面において「加害」、「被害」、「傍観」、「観衆」、「解決」の立場を体験した人の割合を重複を許して示したものである。

加害体験については、「接触拒否」がもっとも多く、男女とも約半数の人が体験していた。男子では「殴る・蹴る」といった身体的暴力が多く、女子では「接触拒否」のほか、「無視・仲間はずれ」などの集団的ないじめが多いことが示された。被害体験については、男子では「殴る・蹴る」、女子では「無視・仲間はずれ」が高い体験率を示し、「接触拒否」の被害体験は加害体験にくらべて極端に少なかった。このことから、「接触拒否」は、特定の個人が被害の対象になりやすいことが示唆される。

第三者の立場については、傍観体験がもっとも多く、観衆体験や解決体験は少なかった。いじめを解決するには、加害者を減らすだけでなく、このように大多数を占める傍観者をいかに減らすことができるかが重要であるといえよう。

2. いじめ場面における立場間の関連

各いじめ場面での「加害」、「被害」、「傍観」、「観衆」、「解決」の体験が、それぞれ場面でどのように関連しているのかを検討した。場面ごとの立場間の関連性（ ϕ ）をTable 3に示した。

立場間の関連性は全体的に低いが、場面を通じて加害体験と観衆体験に正の関連、解決体験と傍観体験に負の関連が示された。このことは、加害者になる人はいじめをやり立てる観衆にもなりやすく、逆にいじめを解決しようとする人は傍観者にはなりにくいことを意味している。解決しようとする人は加害者とならないよりも、むしろ傍観者とならない点は注目に値する。傍観体験は、解決体験と一貫して負の関連が示されただけでなく、全体的な傾向として他の立場と負の関連にあり、傍観者はいじめという事態にまったく関わらないことによって、自分を守ろうとしているのかもしれない。

被害体験については、「殴る・蹴る」での傍観体験と負の関連が示されたのみで、それ以外の場面ではほとんど関連が認められなかった。被害者といえども、何

Table 1 「生徒の心理的特徴」の因子分析結果（主因子法、プロマックス回転後）

項目	I	II	III	IV	V
＜自己肯定感 ($\alpha=.88$)＞					
27 自分に自信がある	.82	.06	-.18	-.09	-.01
19 自分のことが好きである	.81	.05	-.03	.04	-.07
1 自分には、人よりすぐれているところがある	.76	.14	.11	-.30	-.07
8 自分はやればできる人間だと思う	.69	.04	.07	.01	-.18
34 自分には、人に自慢できるところがある	.68	.05	.14	-.03	.09
23 今の自分に満足している	.68	.01	-.17	.13	.10
30 自分の未来は明るいと思う	.63	-.09	.01	.18	.22
21 これから生きていく中で、楽しいことがいっぱいあると思う	.63	-.13	-.03	.23	.14
13 何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う	-.59	.30	.14	.04	.01
40 自分は何をやってもだめである	-.58	.37	.00	-.03	-.01
11 自分は将来の夢をもっている	.45	.39	-.03	.02	-.06
＜友だちへの同調傾向 ($\alpha=.71$)＞					
29 仲間はずれにされないために、友達に同調することがある	.19	.67	.05	-.10	.08
37 一生懸命勉強していても、そのことは友達に知られたくない	.09	.61	-.42	-.10	-.05
38 周りのみんながしていることは、自分もしなくてはいけないと感じる	.01	.61	.06	.06	.13
39 友達どうして決めたことには、自分だけ反対できない	-.06	.56	.08	-.01	.08
26 周囲から浮いていないか気になる	-.16	.47	.28	-.15	-.12
20 興味のない話でも友達に合わせてしまう	-.02	.47	.07	.17	.17
6 人前で、目立つことは避けたい	-.31	.45	-.23	.09	-.24
18 自分ひとりで行動することは怖い	-.17	.43	.18	.20	.12
＜友だちからの承認欲求 ($\alpha=.71$)＞					
12 友達に無視されると孤独を感じる	-.15	-.02	.70	-.03	.16
3 友達には自分のことを認めてもらいたい	.35	-.02	.66	-.14	.02
15 友達が自分のことをどう思っているか気になる	.07	.16	.63	-.07	.01
16 大人の人にはもっと自分の話を聞いてもらいたい	-.05	.02	.54	-.01	-.07
5 自分の将来を考えると不安になる	-.22	.13	.51	.01	-.14
2 友達の輪の中にいないと不安になる	.00	.14	.49	.05	.21
9 親しい仲間内での約束は絶対にやぶらない	.00	-.29	.40	.32	-.14
＜大人に対する信頼感 ($\alpha=.72$)＞					
41 大人の話は信用できない	-.11	.10	-.07	-.76	.04
28 大人の世界は汚いと思う	.27	.07	.18	-.69	-.19
25 大人の言うことは納得できないことが多い	.02	.00	.18	-.68	.03
10 大人は頼りになる存在だと思う	.13	.19	.18	.51	-.26
4 大人はどんなときでも自分を助けてくれると思う	.27	.15	.20	.44	-.14
＜反優等生願望 ($\alpha=.74$)＞					
31 少しくらい不良の方がかっこいいと思う	-.06	-.12	.20	-.07	.79
24 良いことも悪いことも友達といっしょならできる	.06	.08	-.07	.08	.68
14 悪いことでも、多少しておいた方が友達のうけはいいと思う	.07	.22	-.15	.06	.64
33 悪いことをしている友達でも、友達である以上裏切ることにはできない	.08	.12	.11	-.16	.52
22 わざと友達の前で、悪ぶってみせることがある	.08	.34	.09	-.06	.48
＜残余項目＞					
7 何かを決めるときには、友達の意見を必ず聞く	-.08	.20	.13	.30	.14
17 友達にまじめな人だと思われたくない	-.11	.00	.00	.04	.28
32 友達に欠点を指摘されると、自分を否定されたような気持ちになる	-.13	.36	.15	.07	.06
35 困ったときには、身近な大人に相談する	.16	.18	.14	.39	-.29
36 自分が大人になるころには、日本はもっとよい国になっていると思う	.16	.22	-.24	.38	.22
寄与率 (%)	14.30	10.20	9.00	7.90	7.30

Table 2 いじめ場面における各立場の体験率

		当事者		第三者			全体
		加害	被害	傍観	観衆	解決	
落書き	男子	18.9	20.7	45.0	4.5	2.7	52.3
	女子	10.2	7.4	24.1	2.8	6.5	38.0
もの隠し・もの壊し	男子	16.2	17.1	28.8	2.7	5.4	41.4
	女子	10.2	13.0	20.4	0.9	5.6	34.3
無視・仲間はずれ	男子	21.6	14.4	27.9	3.6	6.3	43.2
	女子	34.3	29.6	33.3	3.7	13.0	52.8
接触拒否	男子	45.0	9.9	49.5	9.0	1.8	65.8
	女子	52.8	0.9	58.3	10.2	3.7	69.4
殴る・蹴る	男子	39.6	30.6	40.5	9.9	11.7	62.2
	女子	5.6	9.3	22.2	1.9	4.6	29.6

単位=%；「全体」=いずれかの立場を体験した者の割合

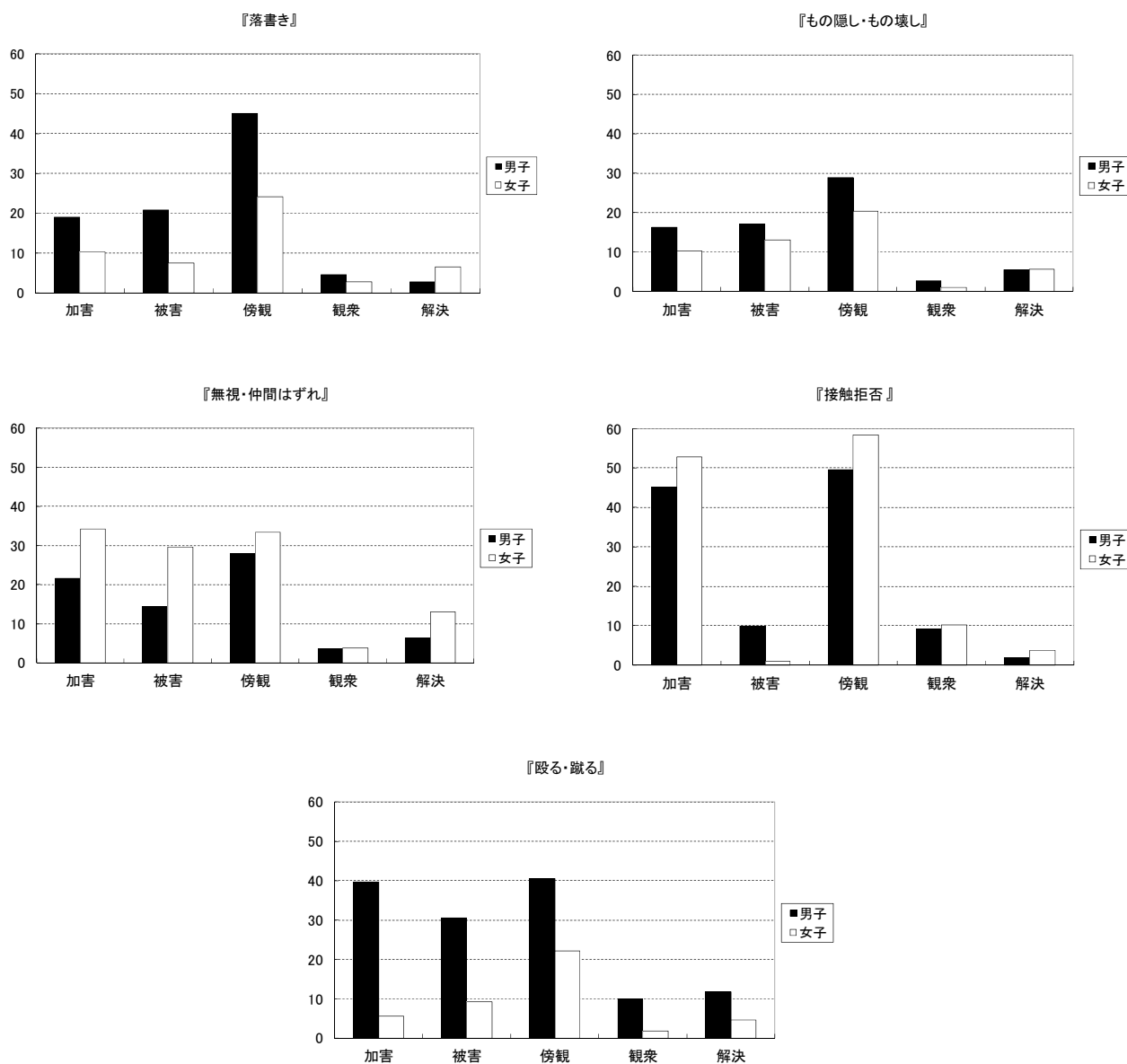


Figure 1 いじめ場面における各立場の体験率

Table 3 いじめ場面における各立場間の関連 (ϕ)

		加害	被害	傍観	観衆	解決
落書き	加害		.09	-.13	.27	-.09
	被害	.09		-.14	.12	-.15
	傍観	-.13	-.14		-.28	-.37
	観衆	.27	.12	-.28		.02
	解決	-.09	-.15	-.37	.02	
もの隠し・もの壊し	加害		.23	.06	.31	-.23
	被害	.23		-.18	.16	-.19
	傍観	.06	-.18		-.07	-.35
	観衆	.31	.16	-.07		-.09
	解決	-.23	-.19	-.35	-.09	
無視・仲間はずれ	加害		-.15	.04	.24	-.20
	被害	-.15		-.06	-.12	.11
	傍観	.04	-.06		-.01	-.27
	観衆	.24	-.12	-.01		-.05
	解決	-.20	.11	-.27	-.05	
接触拒否	加害		-.15	-.16	.25	-.03
	被害	-.15		-.03	-.12	.06
	傍観	-.16	-.03		-.32	-.24
	観衆	.25	-.12	-.32		.01
	解決	-.03	.06	-.24	.01	
殴る・蹴る	加害		.17	-.26	.39	.06
	被害	.17		-.30	.14	.22
	傍観	-.26	-.30		-.25	-.29
	観衆	.39	.14	-.25		-.02
	解決	.06	.22	-.29	-.02	

らかの要因によって、他の立場にもなりうる可能性が示唆される。

3. いじめの立場における心理的特徴

5つのいじめ場面において、それぞれの立場で体験した場面数を重複を許してカウントした。そして、その上位20%を基準にして、それぞれの立場での体験高群と低群に分類した。なお、対象者は5場面中1場面でもいじめ体験のある者とし、5場面を通していじめ体験のなかった30名は分析から除外した。その結果、「加害者」では3場面以上(20.6%)、「被害者」では2場面以上(23.8%)、「傍観者」、「観衆」、「解決者」では、1場面以上での体験者(傍観者で12.2%; 観衆で20.1%; 解決者で25.4%)がそれぞれの立場の体験高群として分類された。

次に、各立場の体験高・低群間で心理的特徴に違いがあるかどうかを比較検討した(Table 3)。

その結果、加害体験の高・低群間では、「大人に対する信頼感」と「反優等生願望」で有意差が認められ、加害体験の多い人は少ない人にくらべて、大人に対する信頼感が低く($t(187) = 3.06, p < .01$)、反優等生願

望が強いことが示された($t(187) = 4.23, p < .01$)。

同様の結果は観衆体験高・低群でも認められ、観衆体験の高い人は低い人にくらべて、大人に対する信頼感が低く(観衆: $t(187) = 2.16, p < .01$)、反優等生願望が強いことが示された(観衆: $t(187) = 2.96, p < .01$)。

解決体験の高・低群間では、「自己肯定感」と「大人に対する信頼感」で有意差が認められ、いじめを解決した体験の多い人は自信が高く($t(187) = 1.79, p < .10$)、大人に対する信頼感も高いことが示された($t(187) = 2.29, p < .05$)。実際にいじめを行ったり、はやし立てたりする加害者や観衆と、いじめを解決しようとする解決者では、大人に対する信頼感が大きく異なる点は注目し得る。このことは、いじめという現象が単に友だち同士の問題だけでなく、親や教師の大人への反抗や不信感という問題をもはらんでいることを示唆している。

被害体験については、被害体験の多い人の方が少ない人にくらべて「友だちからの承認欲求」が高いことが示された($t(187) = 2.06, p < .01$)。被害体験の多い人は、友だちから承認されることが少なく、その欲求を満たすために、集団から逃れられないのかもしれない

Table 4 各立場の高低群別の心理的特徴

	加 害		被 害		傍 観		観 衆		解 決	
	高	低	高	低	高	低	高	低	高	低
自己肯定感	36.64 (8.26)	34.65 (9.08)	35.22 (9.77)	35.01 (8.69)	35.10 (8.78)	34.78 (10.14)	35.71 (8.96)	34.90 (8.94)	37.04 (9.25)	> 34.39 (8.75)
友だちへの同調傾向	22.49 (6.02)	23.51 (5.48)	24.42 (5.02)	22.94 (5.73)	23.46 (5.48)	22.13 (6.33)	23.76 (5.89)	23.18 (5.53)	23.00 (5.68)	23.40 (5.58)
友だちからの承認欲求	24.59 (4.88)	24.09 (5.41)	25.60 (5.39)	> 23.75 (5.21)	24.25 (5.19)	23.78 (6.13)	24.71 (5.44)	24.06 (5.27)	25.08 (5.57)	23.89 (5.19)
大人に対する信頼感	10.41 (4.16)	< 12.53 (3.79)	12.18 (3.66)	12.07 (4.05)	12.13 (4.02)	11.87 (3.43)	10.87 (4.13)	< 12.40 (3.86)	13.21 (3.86)	> 11.72 (3.92)
反優等生願望	15.97 (3.56)	< 12.93 (4.11)	13.36 (4.54)	13.62 (4.07)	13.72 (4.27)	12.39 (3.29)	15.32 (4.28)	< 13.12 (4.05)	13.73 (4.35)	13.50 (4.13)

() 内は標準偏差

い。

傍観体験については、いずれの側面についても有意な差は認められなかった。これは、全般的に傍観体験の割合が高く、傍観者とそうでない人の違いが明確にできなかった可能性が考えられる。また加害者と観衆の違いについても、同様の心理的特徴を有することが示されたが、加害者と観衆が同じ心理的特徴を有しているのか、あるいは、加害者と観衆が重複しているために、結果として、同じような心理的特徴が示されたのかについては明らかでない。

そこで、傍観者に関する分析と、加害者・観衆に関する分析については、さらに詳細な分析を行うことで、それぞれの特徴をより明確にすることにした。

傍観体験に注目した追加分析

各場面での傍観のみを選択した人数は、「落書き」で40名(21.2%)、「もの隠し・もの壊し」で26名(13.8%)、「無視・仲間はずれ」で14名(7.4%)、「接触拒否」で34名(18.0%)、「殴る・蹴る」で28名(14.8%)であり、189名(53.4%)という多くの生徒は、傍観者としてのみ体験していた。

そこで、この189名を分析対象として、さらに傍観を選択した場面が「1場面以下(85.2%)」と「2場面以上(14.8%)」に分類し、その心理的特徴を比較した(Table 5)。

その結果、「友だちへの同調傾向」で有意傾向の差が認められ、傍観体験の多い生徒は少ない生徒にくらべて友だちへの同調傾向が強いことが示された($t(187) = 1.67, p < .10$)。

加害と観衆に注目した追加分析

加害者と観衆との心理的特徴は、先述した分析では、加害者と観衆者はともに、大人への信頼感が低く、反優等生願望が強いことが示されていた。ただし、こ

の分析では、ある立場で高群に分類された生徒が他の立場をどの程度体験しているのかは考慮されていない。たとえば、加害高群に分類された生徒の中には観

Table 5 傍観の高低群別の心理的特徴

	傍 観	
	1場面のみ	2場面以上
自己肯定感	34.07 (10.92)	35.24 (8.56)
友だちへの同調傾向	21.68 (5.73)	< 23.58 (5.54)
友だちからの承認欲求	23.21 (6.02)	24.36 (5.17)
大人に対する信頼感	11.29 (4.15)	12.24 (3.91)
反優等生願望	12.89 (4.36)	16.38 (4.15)

() 内は標準偏差

Table 6 加害と観衆における心理的特徴

	加害のみ 有	加害・観衆 とも有	加害・観衆 とも無
自己肯定感	34.80 (8.88)	35.49 (8.98)	35.09 (9.14)
友だちへの同調傾向	22.93 (5.54)	23.84 (5.96)	23.64 (5.53)
友だちからの承認欲求	24.09 (5.15)	24.76 (5.50)	24.00 (5.55)
大人に対する信頼感	12.35 (4.00)	10.97 (4.13)	12.51 (3.62)
反優等生願望	13.95 (3.67)	15.19 (4.27)	> 11.58 (4.29)

() 内は標準偏差

衆体験の高い生徒も含まれている可能性があり、彼らの心理的特徴が純粋に加害体験のみと関連しているとは言い切れない。そこで、ここでは加害体験と観衆体験の違いをできるだけ切り離すことを試みた。具体的には、5場面を通じて加害者しか体験していない人を「加害のみ有群（98名）」、観衆しか体験していない人を「観衆のみ有群（1名）」、ともに体験のある人を「加害・観衆ともに有群（37名）」、ともに体験のない人を「加害・観衆とも無群（53名）」に分類し、それぞれの群間で心理的特徴を比較することにした。なお、「観衆のみ有群」に該当する人は1名しかいなかったため、分析では、「観衆のみ有群」を除く3群間の心理的特徴を比較した。

その結果、「反優等生願望」において、群間の効果が認められ ($F(2, 185) = 10.13, p < .01$)、下位検定の結果、加害のみ有群と加害・被害ともに有群は、加害・被害ともに無群にくらべて有意に反優等生願望が強いことが示された。

考察

1. いじめ場面における各立場の体験率

いじめ体験者が最も多かったのは、「接触拒否」場面であった。この場面では、全調査者の68%が何らかの形でいじめを体験していた。この場面で特徴的だったのは、加害者、傍観者が多く、被害者、解決者が少ないことである。このことは、特定の個人を多くの人がいじめており、見ている人はたくさんいるにも関わらず、その行為をやめさせようとする人はほとんどいないことを示唆している。また、被害者が少ないことから、同じ生徒がいじめの標的になっている可能性が示唆される。

いじめ体験の男女の違いについては、男子では「殴る・蹴る」といった身体的ないじめが相対的に多いのに対し、女子では、「無視・仲間はずれ」といった集団を基盤としたいじめが相対的に多いことが示された。ただし、女子の「無視・仲間はずれ」は、集団状況という多くの生徒が関わる場面であるがゆえに、そのなかから解決しようとする生徒も比較的多いことが示された。

2. 各立場の心理的特徴

いじめ場面における立場(加害、被害、傍観、観衆、解決)をその体験回数をもとに高低群に分け、その心理的特徴について検討した。

加害者と観衆については、大人への信頼感が低く、反優等生的願望が強いという共通の心理的特徴が示された。また、加害体験の多さと観衆体験の多さは関連しており、加害者になる者は観衆にもなりやすいことも示された。森田・清水(1994)によれば、加害者と

観衆はともに、規則や教師に依存した秩序化を求めず、意志決定においても生徒主導型を志向し、社会的勢力についても盲従的態度を拒否し、集団活動や集団課題に対しても非協力的である、という同じ特徴を有していることを指摘している。本研究の結果は、この指摘と一致する部分が多い。ただし、観衆は加害者よりも自己中心的で、権力への服従傾向が強いことも指摘している。これらの違いは、本研究では明確にできなかったが、この点については今後さらに検討する必要があるだろう。

被害者については、友だちから承認欲求が強いという結果が示された。これは、いじめの被害者は友だち集団への依存度が高い、という丸山(1999)とも一致する。吉田(1996)は、いじめられなくなるということは、完全な異質者になるということであり、集団の一員としてみなしてもらえなくなることであり、述べられている。つまり、被害者は、友だちとのつながりを維持したいがために、多少のいじめがあってもその関係を断ち切れぬというアンビバレントな状態にあることが示唆される。

最後に、傍観者と解決者について考察する。本研究では、傍観者は友だちに対する同調傾向が強く、解決者は自己肯定感と大人への信頼感が高い、という結果が示された。森田・清水(1994)によれば、傍観者と解決者(森田の文内では仲介者)はいずれも積極的で協調性が高く、学級集団に適応しているが、解決者は権力からの自立性が強く、生徒からの圧力にも権威にも屈しないたくましさ備えているのに対し、傍観者は表面的には権力に服従的であるものの、加害者や観衆を暗黙裡に支持しており、自分の身の安全を確保していることを指摘している。また楠(1996)によれば、解決者は価値観や生き方の水準での自立が傍観者にくらべて進んでいると指摘している。本研究でも解決者は自己肯定感が高く、彼らが自分なりの価値観を作り上げていることが示唆される。傍観者と解決者は類似した特徴を有していると言われていることから、傍観者の価値的自立を促すことが、傍観者を減らし、ひいてはいじめを減らすことにつながっていくことが期待される。今後は、この点についてより詳細に検討する必要があるだろう。

3. 本研究の問題点と今後の課題

本調査では、具体的な5つのいじめ場面を設定し、そこで体験した立場を、重複を許して回答させた。その結果、ある立場のみを多く体験している生徒を抽出することができなかった。このことは、同じいじめ場面であっても、多くの生徒は、加害者、被害者、傍観者、観衆、解決など、さまざまな立場を体験しており、ある特定の人物だけが特定の立場を多くするというわけではないことを意味している。しかし、このような問

題点があるにもかかわらず、いじめの立場間で生徒の心理的特徴に違いがあることも示された。今後は、測定法や分類法を工夫して検討する必要がある。

また本研究の大きな問題点として、調査対象の少なさが挙げられる。いじめに関する調査は、公的機関が行う場合は比較的实施しやすいが、個人研究では限界がある。今後は、対象校をより多くするとともに、学校現場のいじめ問題にどのような示唆や提言ができるのかという、より具体的、実践的な研究が望まれる。

引用文献

- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2009). 生徒指導上の諸問題の推移とこれからの生徒指導—データに見る生徒指導の課題と展望—, ぎょうせい
- 楠凡之 (1996). 思春期のいじめ問題の諸相について—そのカテゴリー分類の試み— 北九州大学文学部紀要 (人間関係学科), 3, 1-20.
- 丸山真名美 (1999). 思春期の心理的特徴と「いじめ」の関係 心理科学, 21, 1-16.
- 正高信男 (1998). いじめを許す心理 岩波書店
- 文部科学省 (2012). 平成23年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」
- 森田洋司・清永賢二 (1994). 新訂版いじめ—教室の病— 金子書房
- 大西彩子・吉田俊和 (2010). いじめの個人内生起メカニズム—集団規範の影響に着目して— 実験社会心理学研究, 49, 111-121.
- 吉田修二 (1996). いじめの心理構造を解く—学校の開放をめざして— 高文研